

蓑笠雨談上

45
1268
1

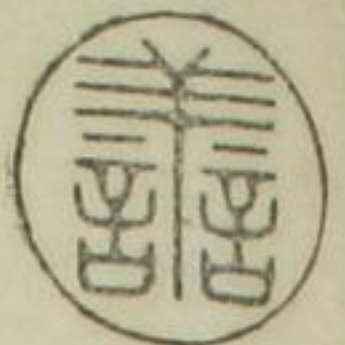


15
1268
1-3

遠
1462
卷

1268
1

特別



叢坐兩談自序



壬戌夏月予遊京畿客於函西諸州
徑履千折之路晨風夕雨祀霧象星
重繭數百里不覺緇塵染素衣瑣
而東西遊行百又餘日碧水丹山名
花異植應接不暇山水幽致雅俗碑
言錄以備邊忘始屆季秋得造門基
時方輕寒凄然回以其所筆之草且
補破遮寒偶書肆重三郎未訪寒暄



叢坐兩談卷之一

刀編二

已畢談及著述之事。見坐間散落字
紙數十頁。取而讀之。曰。王翁之西遊
必有異聞。而今果有此書。詎覆孰之
為強請。梓之予謂否。顧昔人之著書。
扶微拓理。無一字空設。準以實見。據
以經史。此書固方俗巷談之小事類。
多浮詭。不如闔口而無言。書肆曰。不
然。夫不龜手藥。宋吳各異。其灰用。蓋
士君子者。為道刻。而不謀利。書賈者。

為利刻。而不慮道。雅俗霄壤。大殊其
趣。又不足尤也。遂豪奪而去。手自搯
纒。點定。淨書。經月餘。而携來。乞標。予
不得已。以兩談命之。而彼復噴予。號
以藁笠二字。冠其上。嗚呼。如是書。特
一時之灰。筆記。始無意。梓行。豈思遽
登梨棗。金聖歎嘗以手紙。筆墨之四
費。批西廂記。予淺陋。加之費。個意思。
却招大方之嗤笑。有深愧於心焉。迨

○ あり考りし二編三編に編みたるは、亦人の
 のしよは、内々を、紀せし、亦、た、月、恨、し、事、も、あ
 り、る、也。

○ 第一卷の相列より江州まゝの話をとる。第二卷の
 京師の説をとり。第三卷の浪花人の傳を述、これ
 ととめ、次に、あ、り、る、事、を、二、編、三、編
 の、例、に、あ、ら、せ、り。亦、紀、行、は、あ、ら、せ、り、評、は、あ、ら、せ、り、
 い、ろ、ろ、の、江、戸、及、諸、列、の、考、を、載、圖、説、を、あ、ら、せ、り、
 前、よ、り、の、説、が、如、し。

養笠雨談初編大意終

養笠雨談初編總目錄



卷之一

- 富士の農男并浅間れ辯
- 駿馬の蹄趾并東福寺の釜
- 紅毛人の墓并來船人の歌曲
- 西念寺の古鐘并藪子香の物
- 津嶋系并辛崎の狐松
- 筑麻糸の圖説并正徳四年江戸根津糸札の番附
- 三上鏡れ兩恋并百足山の経
- 藪の下奴茶屋の權輿

卷之二

- 吉野の傳并蟹の盃れ圖説

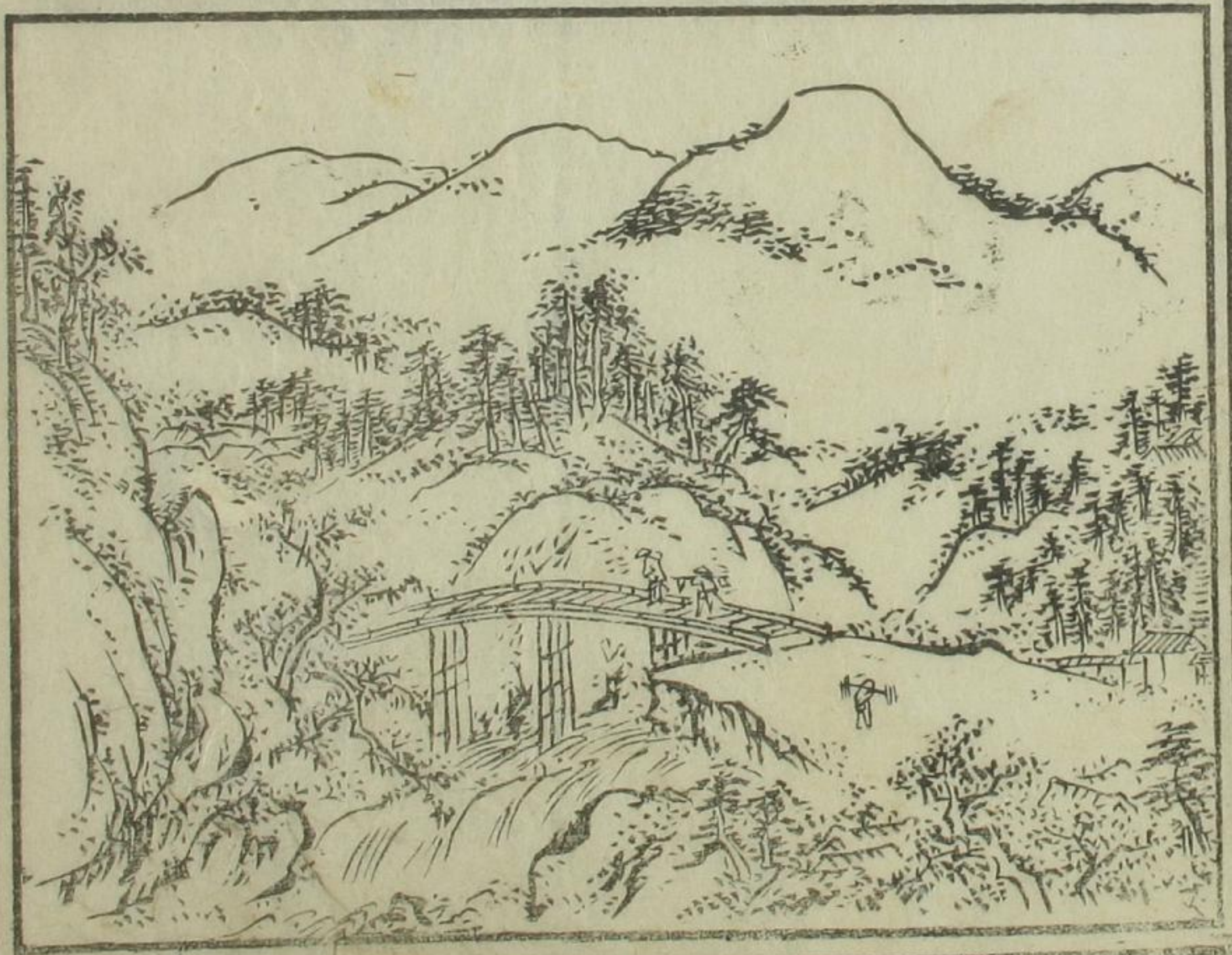
- 烟苑書畫帖展覧の目録
- 大永八年傾城局の券書
- 應舉が所請并所馬比話
- 八文字を自笑の畧傳并其頌
- 里うさうぶれ解并せんむ万歳の畧説

卷之三

- 俳諧師鬼貫が傳同道引
- みの屋三勝が古家并笠屋三勝が辨
- 院久が墓并瓢草よとの圖説
- 夕霧が墓 同畧傳
- 浪速五人男
- 近松門九巻の注文の自序

初編總目録 畢

終日長程
 復短程一
 山行盡一
 山青路傍
 君子莫相
 笑天上由
 來有客是



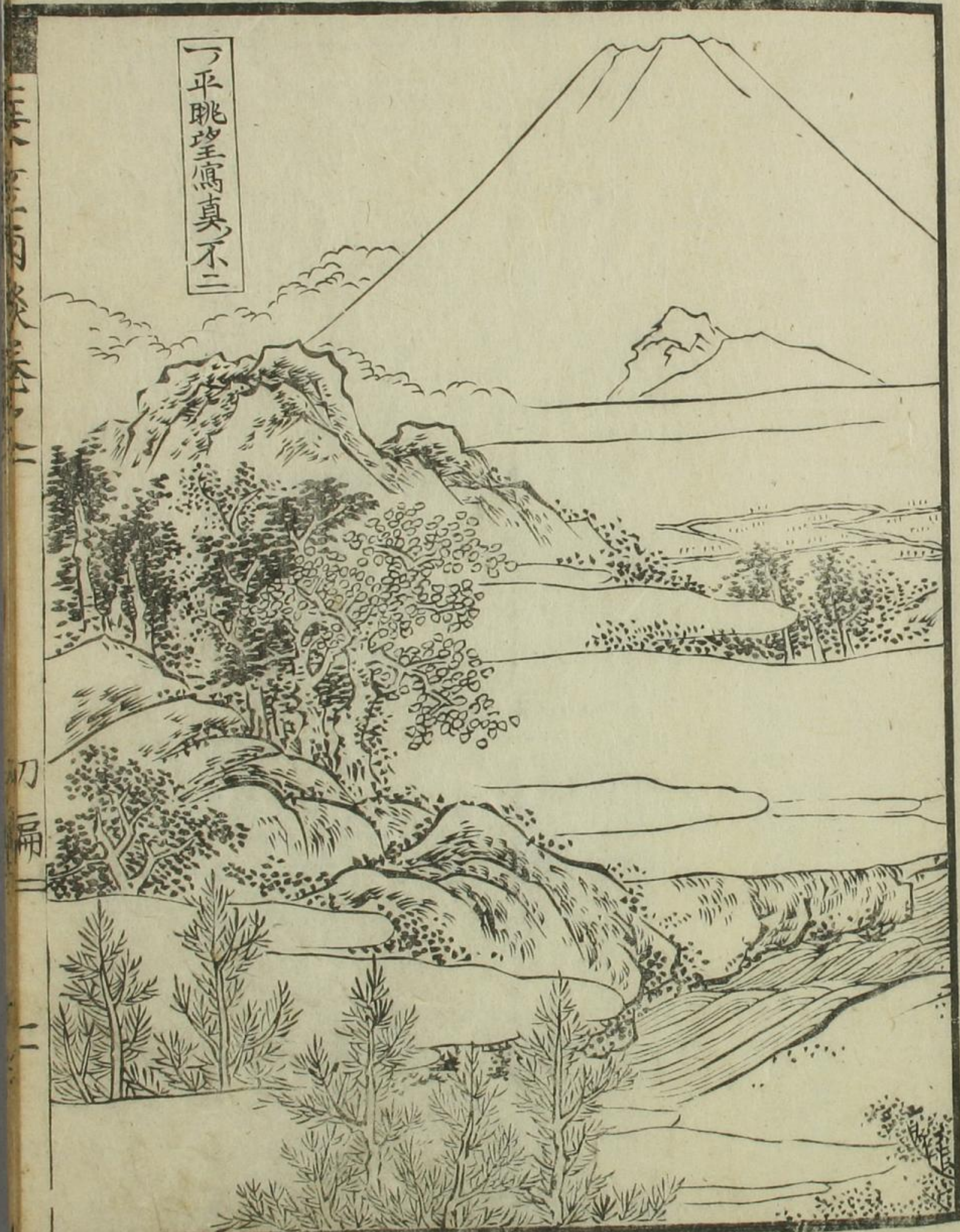
尾花毛とろけの約
額姑こいね峯ねの
とくめい
うね

獨立巍々白玉巒
中天積雪夏猶寒
五雲佳氣連金闕
雄鎮扶桑萬歲安
朝鮮張應斗



石橋馬蹄

一平眺望寫真不二

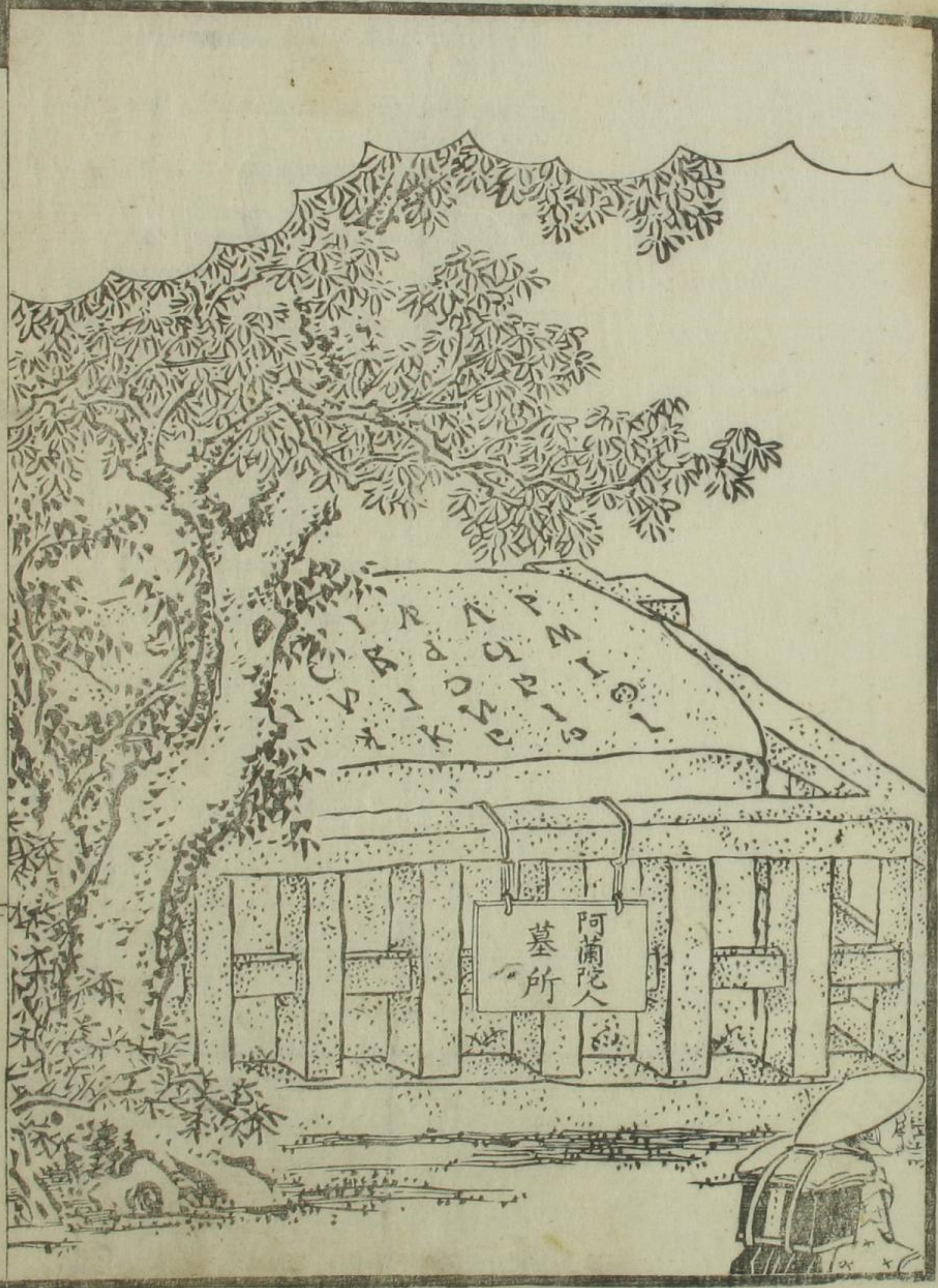


香の五費軒

阿の京の比の

文の字の

墓の主の心の



掛河下渡町の大湯氏より。哪啖劉慈乙が書る扇面を得る。
 里。本船人の書画奇と云ふ事なきねど。らるる小ぶりの暮書也。

渡魚 歲晚渡
 江津
 笋飯 尊羨又
 換春
 桑印 可望天

上家
 射書 元屬海
 東人 列然也

印泯滅不可復焉

○西念寺の古鐘 并 藪小香什物
 六月中旬尾陽子ありて。一日鳳凰山甚目寺不精。二里西あり。
 土俗ハおろくといひて。本尊正親世音ハ推古天皇即位四年丁巳甚
 村の名もふを利。同龍磨といふその網して海底より引とるなり。名目寺
 と号するより縁起より見えたり。志ろれば千百余年の靈場

表集同前卷之十一
 名目寺
 十一

つる。この寺は江州西念寺の鐘あり尋常の鐘よりちひ
す。建武二年依本依渡入道乃益が芳進之の銘云

江州西念寺鐘

晨鐘響達振十方界
夕梵聲廣度三有際
三寶久住四生俱利
天下泰平海内安全

建武二年三月二日

大工藤原の安
大檀那道譽
住持比丘令海

外子文ありて下ろ方へ讀む蓋依本氏鼻祖宇多天皇の
所子教員親王の本孫兵庫頭成朝をめぐりて屬の長と
す。江州依本之城は居住一依本氏と稱す世人今多保氏或
は保氏と稱す

入道道基の成頼より五代源三秀義六世の孫あり。幸途
を平紀よりえり西念寺舊趾を考るといふもおりは織
田の長礼小山門の末寺回祿せり時或は淺井滅亡の時なご
こそこの鐘をめぐりてまゝこのあり

この日阿波島の森藪小香の物又よなり。八町斗東へこの辺川

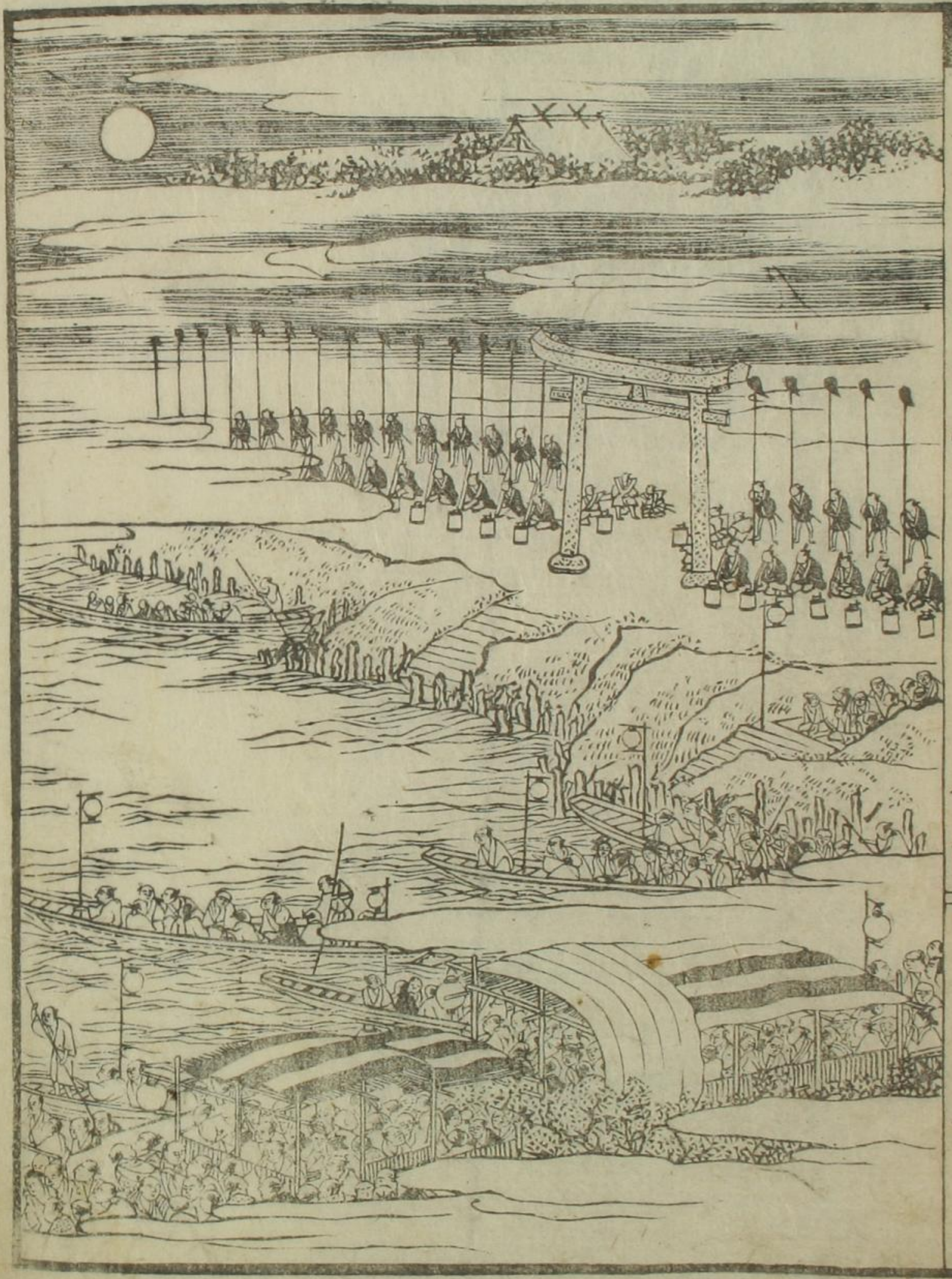
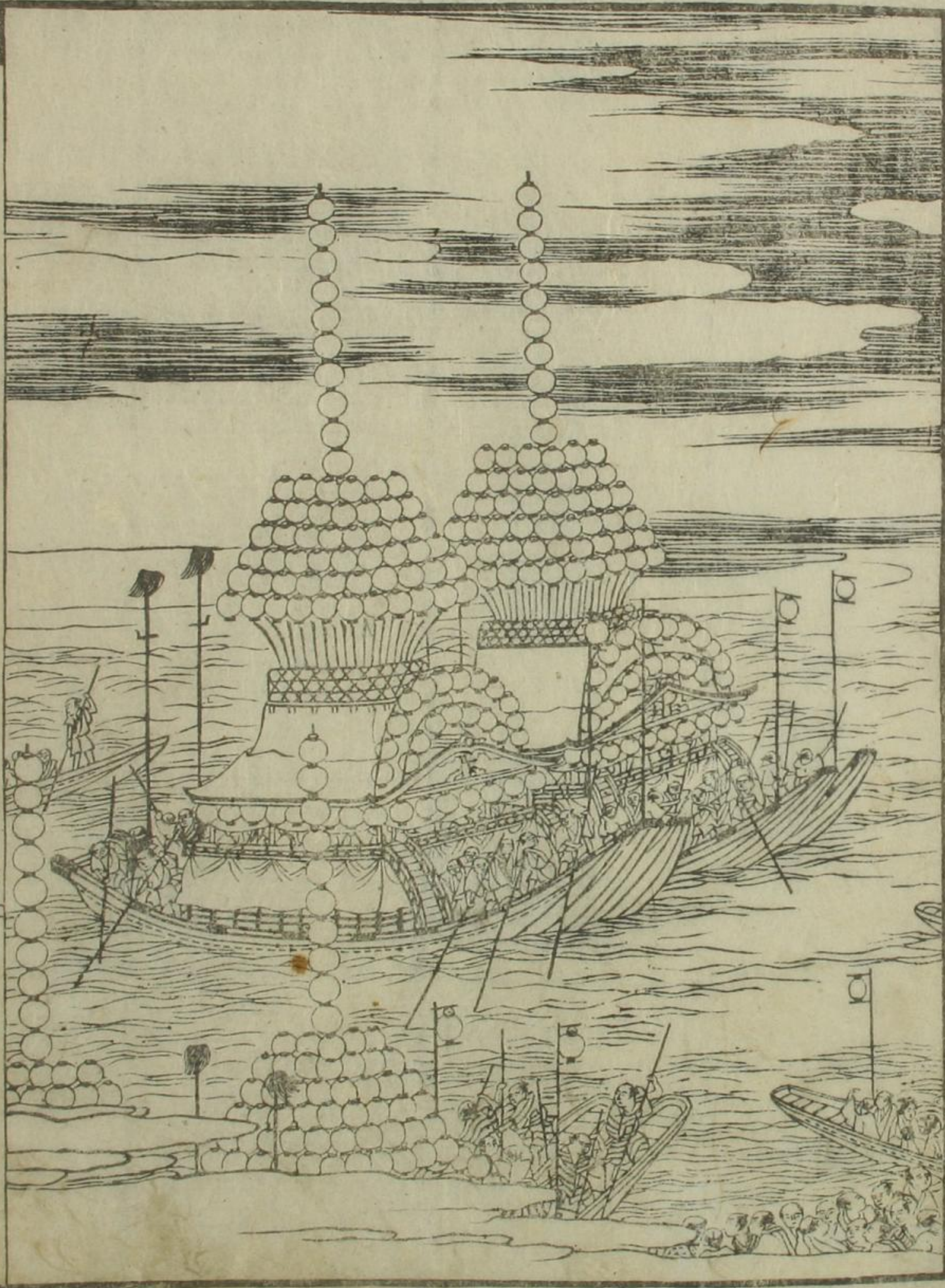
あり橋あり。まごらのさる大和路は宵たごころ多燈のそと
華表あり。このうちさかから阿波島のあり華表を潜
せ町ぞろあけは茶臼小最祠あり。祠のまゝは年中祀神
楽堂あり。この右のかごは大竹數十竿茂出り藪のそと五
斗ぞろも入るべし桶あり。桶のまゝも小祠あり。桶蓋
く大なる石をのせり蓋も破れくもふい何もあはれくも
備はれをくも香の物頂戴の人と寺へまのくべしと記たり

寺を正法寺と号す。曹洞の寺葺津村のうらまあり。古老
 傳くゆひのひの近村の農民耕作のつづき、弘大根の影を
 この桶の中へ投入し、通るぬきをり、竹藪中におく香
 の物熟せしむ。又一説は、この山の神の物のまやして、熱田に
 神供えこの所より調進す。神饌のうら野菜あり、さかひちを
 たりといふ。國志、諸葛亮、襄陽軍を渭南に率く、戦を挑む。司
 馬懿出でて固く懿は巾幗を擡る婦人の飾、懿怒り、表
 をり、戦を決せんと、諸條下は懿が云、豈知野夫有切者
 也。云々。おぼよこのもの俗語、これよりなりといふと、尾張人
 はこれを否し、この香の物よりなりといふ。いづれが是なるや

○津嶋祭并唐崎の狐松

津島は名古を去ると五里、神去月十四十五年、願天五葉を

神社尾張國門前郡藤波の里にあり。或記に云、欽明天皇元
 年、ゆめをこれをまゐる。神ゆめ西海の對馬に降、後尾張の
 海に移る。ゆめゆめの旧地を表して津嶋と号す。饒天皇は
 所宇の社をまゐる。ゆめの社に柏森あり。後、居森の地に移し、
 又、又祠を今の地よりゆめとす。船の上の樂あり、狐は車樂一
 成の舞曲妙音の笛声、別調を神製志あり。ゆめゆめ、この樂
 の一成を津島笛車樂舞とよび、ゆめゆめたりとす。又車樂の説
 皇廂大隅といふものを、土黨の氏士、計策を以て討つし、起す。
 渡食の紀あり、紀といふも、社説これを否して、取説をりらう。六月
 二日、絃樂あり。八日、八町毎の車屋ありて、調樂あり。十三日、江口ふおれ
 晴の絃樂あり。十四日の宵祭、十五日の朝祭、里俗を歩舞
 といふ。この日、遠近諸所の良伎群集して、旅店も四五十人を合宿す。



おろく来るものハ宿なく。麓下子不く雨をくも雨りとき。ま
 十四日今夜園の正に船五艘各船出く一の名居堀の正の正
 名亦次舟子船中船房船中二百六十個の挑灯ハ一年の日の数子
 象耳生象耳の挑灯十二個ハ月の数子。欄四方の挑灯三十個ハ
 一月の月数を表と。船一艘ハ挑灯とづく四百余張いづれも象耳
 竿よつたはけて。次舟くこれに張この知岐岨川の末まで
 その巾敷町より及ぶ。大河ハ大船をうく。二千余個の挑灯
 を約とく。バの船水ハ映く星の如し。糸縷の巻船ハ左右の
 堤子機装をうけ。或ハ糸船してこれを見る。のり合ハ五十人
 も堅固の武士を半一ひくいと嚴重なり。元この河ハ橋あり
 一敬云。雲ハ橋の上あり。出水後橋を以。名居の左右に列と
 十五日の朝。象ハ市駿車を先とく。津嶋の車乐山車。その最後

橋論して五村次舟を論せど。五村ハ米坐塘下。茂場今市場
 下構是之件の五艘錦繡の幔幕。綾羅の水引ホは装之欄干。虫
 綿の陣羽羽を。この陣羽ハ大岡秀吉の錦の五采旭映して月さし。つらと。衣形のとふハ。此人形と居
 山車中又ハ管絃あり。船を展本社ハ八町あり。是と夜射
 たる見二人ハ船ありあり。社ハ楯又別ハ布の水引。山車船ハ被
 後より禮あり。山車の上より銃炮をらんとこれを合合園ハ船中
 より槍を四五羽つとちや。是放生會のあり。これハ朝朝五
 大カア。胡胡の油あり。揚揚たるもの。その餅餅をたれハあふ。この
 秋。これをく。又船のく。画画の扇をも。之余ハ津嶋
 ともく。雨く。後店も他人をま。棧棧あり。尺物尺物あり。ゆる



新編 御成敗式目

刀編



貞享二年四月吉日
深江屋右衛門長清坂山崎屋市兵衛行

新編 御成敗式目

刀編

十八

いたのこ
のり
のり
のり

大入る所 二箇 素所

たいねん 素所

武 素所 三丁分

このあきねえまか

小徳るまき 三丁め 上中下町

せうきん せうきん せうきん

俊人大士の

真永丁 七丁 七丁 素所

素所のあきねえまか

素所のあきねえまか

十 芝野町 素所 二箇 素所

一 素所のあきねえまか

十月三箇 素所

二 素所のあきねえまか

十 見平町 素所

三 素所のあきねえまか

十 伏見町 素所

四 素所のあきねえまか

十 南東町 一町 素所

素所のあきねえまか

素所のあきねえまか

六 約込所

七 素所

八 素所

九 素所

十 素所

十一 素所

十二 素所

十 南條町 素所

六 素所のあきねえまか

十 船場町 素所

七 素所のあきねえまか

十 本橋丁 素所

九 素所のあきねえまか

十 二軒山 素所



○三山鏡の両岫并百足山の輝

鏡山の石部にあつて平松砂川の辺より石は高く見ゆ山は班々
 とくまのつひまをこの消ゆるとくまある鏡の名実よむま一かま
 東海道中の好景ゆくあはれささるる又三山はるのまら
 如くみま篆書の山は字お似たり石部と草津の間六地茶
 りとくまのつひまの僅世町をりもあづ。鏡の凹あささるるに池
 あり。去後の説よとくま乃山腹は洞あり。洞の口より二尺可あ
 り肉をあらぶ磨。人物もくまも入る。里人のこれを百
 足山とくま。山中今も蟻蛇多しとぞ。按じま百足山の本
 寺或ハ本明寺の山号なり。この寺山門は属して天台宗なり。が今
 絶たり。三上の山の辺は旧迹あり。織田家の兵火はかきま山門一
 旦滅すの時。江州辺の宋寺も共は回祿とこれも又その一寺な

子ぞ。相傳ふ近江國伊吹郡百足山本妙寺のなま馬鹿親
 世音ハ懐後太秀御が護身本尊なり。今三上の山中安置
 と。二月初午開帳あり。鯨の務は百足山本明神と祀せりと
 其の華平林よ三上明神の社あり。本明寺の親音ハ三上明神
 の本地佛なり。あや。あれをりくあや去後三上山をとくま
 百足山ともくま由名あれよあま。あまれども濃田の橋より三上
 山つらきくま。五里余もある。秀御が瀬田の橋より三上
 山の蟻蛇を射たり。といふ説寓言ありてもあまりよ遠
 これを近江の人は三上の蟻蛇山の濃田より一里をりふ小山あ
 り。是より秀御が射たる蟻蛇ハこの山は棲一よりひはよといふ
 ○藪の下岫茶屋の権輿
 江州藪の下の岫茶屋をハ今も店より弓矢ををのり

古老云因初のころ粟田口は穢出で、旅人をなやませりけ
 ず。藪の下は氏夫あり。浪人しき茶店を知らず。活業
 とす。夜を犯しき系一由人とさる人かあむ。この茶店
 の主人を傭主人とさる。弓箭を携る。その人を三條
 おもむ。おろね。今も店とよ弓箭をかく。この送風なり
 とす。あつて東海道の逢場茶屋をなす。一親
 小この茶店の主人の片岡丑五郎といひ。氏夫なりとす。

茶室雨談初編卷之一終

茶室雨談

